〝背広の浮浪者〟と夜の東京

松沢常夫

妻と二十四歳になる一人娘をおいて家をとびだしてから二年半。食わなくても、身なりだけは崩していない。この半年間は、毎晩、渋谷から池袋までを歩きとおすのが日課。一体、どういう思いでいるのか。昨年十月のある日、〝夜の東京散策〟に同行させてもらった。

捨てる神に拾う神

駅の向いにコーラ、タバコの自動販売機が並んでいる。ササッと、つり銭口をあさる。何回やっても〝戦果〟のなかったところは素通り。ダンボールや石油カンの中も、ときどきチラッとのぞく。高級な感じのする本やエロ本だと、手をのばす。エロ本は上野駅前の古本屋で高く売れるのだというが、そのままにして、さっさと歩きだす。どんな本だったのかと、のぞいていると、すぐおいてけぼりをくってしまう。相当な足だ。

原宿の東郷女子会館前を一時に通過。昼間はファッションショ

白髪の紳士

「やりにくいなあ、あんまりジロジロ見ないでよ」

すきまだらけの歯をむきだしにして、はにかむ白髪の紳士。

午前〇時半。まだ終電が残っていて、明るい渋谷駅。腰下あたりまでの高さがあるゴミ箱をチラッとのぞくと、軽く手をつっこみ、新聞紙をちょっとどける。

「ねっ」

ニッコリしてとりだしたのは、マイルドセブン。なんと、ビニールの封も切っていない、買ったままの姿のタバコだ。反対側の箱からは、二、三本吹っただけのハイライト。

「だからわかんないんだよね。日本人って、なに考えてるのか」

松下博さん、五十九歳。一昨年の冬、〝背広の浮浪者がふえている〟と『毎日新聞』に紹介されたうちの一人であり、〝わが母岡田嘉子〟の手記を発表して話題になったこともある。

ーのような通りだが、夜はまったく人通りがたえる。高級マンションの林がつづき、松下さんの顔のふり方が、心なしか激しくなった。

「先週、ここに、まるっきりあけてもいない、せんべいのカンが置いてあったんだけど、今日は、あんまりおもしろいのはないなあ」「引っこしのときなんか、新品の毛皮コートだの、電気製品だの、ベッドだのがゴソッと出るんだから、いやんなっちゃうよ。年末なんかだと学術雑誌のバックナンバーや参考書の高いのがでるんだ。ほんとに、小型トラックでも持ってきて運びたいよ」

洗濯屋やビジネスホテルにあずけたままになっているオーバーや背広の替え着は、ここの堀り出し物。着ている背広は渋谷で、よっぱらいが脱ぎすてていったらしい品。靴は東京駅のゴミ箱。ちゃんと、ワシントン靴店の紙袋にいれたまま捨ててあったという。皮製でカカトもそんなにへっていないし、二万はするだろう。ズボンだけは、合うのがなくて買った。

ズッシリ重い黒鞄の中は整髪剤からカルダンのハンケチ十枚、銀行においてある経営情報誌など。ほとんどが拾い物。

「一番びっくりしたのは、伊勢丹の紙袋をあけたときだね。買ってきたばかりの一流メーカーのワンピースで、プライスカードが三万三千円ってついてるんだ。捨てるんなら買わなきゃいいのに。〃なにかまちがってるんじゃないか〃ってどなりたくなったね」

二十六個目の自動販売機で、ついに十円玉一個発見。「へへーっ」と、また、歯をむきだして、照れた。

両側のビルからは、点々と螢光灯の明かり。残業か。

代々木の共産党本部前の自動販売機で、バックのコーヒー牛乳を飲む。牛乳はダメで、アルコール類は全然やらない。

少々、前かがみで、亀のように、首を突きだし突きだし歩く。暗い闇に突きぬけるようにそびえるノッポビルが見えてきた。と、ピーロロと虫の声。新宿駅南口の、国鉄コンテナの並ぶ手小荷物取扱所と歩道との間の、全網の下にはえた、わずかな草の中から聞こえてくる。一時三〇分。こんな小さな緑の中なのに…。

新宿

新宿では、たくさんの人が働き、たくさんの人が遊び、その浪費をあさる人びとがいた。

まず、ダンボール集めのおじさん。ダンボールの中のゴミを他のビニールやカンの中につめかえ、ちらかったゴミは、手袋をした手で、きちんとすくい、決して、あとを汚さない。

「いま古紙がたりなくて、アメリカから輸入しているくらいだから、どんどん高くなるよ」という松下さんの話をぶつけてみると、「そうね、だいぶ高くなったね。だけど集める人間もふえてるからな。一晩で一万円ぐらいかな、夫婦でだけど」と、サラリと答えて、「オーイ、こっちだ」と、奥さんを呼びつけ、場所を移していった。奥さんは黄色のヘルメットをかぶり、前かけもしている。

松下さんも戦後の一時期、古紙集めで生計をたてたことがある。しかし、松下さんの場合は、丸の内のビルの管理人にわたりをつけ、良質の古紙をわけてもらうようにして、はいあがることがで

きたという。

どこをどう通ったかわからないうちに、歌舞伎町の方に出ていた。やたらとタクシーが多い。

新宿一といわれる「クラブ・リー」には、出演する有名女優の名がズラリと並び、「月収50万円保障」の看板でホステスを募集していた。この界わいで飲んだ帰りには、電車のある時間でも、必ず一人一台の送り車をよぶのがKDDだったことから、〝KDD通り〟の異名もある。そんな店が軒を並べるなかに、「3日、13日、23日、ビール、日本酒10円」という店や、一杯百三十円のカケそば屋があったりする。焼きいも屋がタバコをふかして客を待っていれば、三味線の流しが通る。〝このやろう〟という声にふりむくと、よっぱらった浮浪者が寿司屋から放りだされ、ゴミためにに顔をつっこまれている。

カキーン、カキーン。いい音がしてきた。新宿バッティングセンターだ。もう二時をまわったというのに、十五のボックスは満員。超スローボールのボックスでは、女性もバットをふっていた。従業員にきくと、朝十時から朝四時までオープンしているという。

米袋の中の寿司

二時一五分。大久保駅のそば。

「ごらんなさい」と指さされて、道路わきに捨てられた米袋をのぞいてみると、包装紙でくるんだままの折り詰め寿司が七つ。バッテラ、三色のりまき、にぎり、と多彩。これが週三回出るという。

「ほんとは、こういうのがいけないんだ。なまけものを甘やかすことになる」

そういう〝自覚〟をもっている松下さんも、やっぱりこを頼りとし、知りあいに持っていってやったりする。

明治通りにぶつかる直前を左に曲がると、タコヤキの屋台。この時間ではもうやっていないが、余ると舟ごと、くるんで捨ててあるのだという。

こういう穴場は、仲間に教えてもらったり、自分の足で開拓したりする。

松下さんと逆に池袋から歩いてくるのが三人いるし、新宿には歌舞伎町専門とか現金専門とか、切符中心とか、いろいろいる。天ぷらの残りものをあさっていた新宿七年という六十近い人は、食料集めだけが〝仕事〟と言っていた。

松下さんも、何回かいろいろなコースを歩き、今日のメインコースのほかに枝コースをいくつかもっている。

だから、浮浪者どおしは、協力関係にあると同時に競争関係にある。東京、上野、品川などの駅では、掃除夫さんたちとも弁当、週刊誌などの奪いあいになる。

さらに、清掃車と競争も激しくなってきた。一年前ころからマクドナルド社は独自の車を出し、ハンバーグ、ポテトフライなどをその日のうちに回収してしまうようになった。

「こうなったのは、中毒にでもなられたらこまるってこともあるんだろうけど、浮浪者が食べたあと、ちゃんとしておかないからなんだ。政治も悪いけど、浮浪者が自分の首をしめるようなことをするからなんだ」

それにしても、ここらへんは、自動販売機がやたらとある。数もだが種類も。

ジュース、コーラ、コーヒー、ドリンク、牛乳、アルコール類はもちろんだが、コーヒーの中にもブラックとか各種、酒類には甘酒や運転手用にアルコール抜きのビールまである。米やアイスクリームも売っていた。

24時間営業

明治通りに出て、新宿勤労福祉会館のちょっと先に、「24H」と書いた黄色いランプの点滅する看板が出ている。セブンイレブンの店だ。

店員は学生アルバイトが一人だけだが、いつも二〜三人はお客が入っている。ほとんど学生。パン、インスタントラーメンなど食品とチリ紙など日用品が主だが、ちょっと変わっているのは、電子レンジがあって、お客が操作できること。

「ちょっと持ってるときは、ここでコーヒーを飲んでくんですよ」。わかしてくれるコーヒーも百円の安さ。

腹がへっていれば、カップラーメンに湯沸器の湯をいれてもらい、レンジでタイムをあわせればいい。立ち食いもよし、外のベンチでゆっくりということもできる。

いったん、こういう飲食店の話となると、さすがに、元レストランの支配人だけある。

「ここはイトーヨーカ堂の資本ですよ。一晩で土、日なんかは十万から五万の売り上げだっていうけど、あの単価だから、たいへんな量が売れてるわけでね。店員は建築と法科の学生が交代でやってて、時給六百円。深夜じゃ安いよ。感心に家に迷惑かけんようにと働いてる。深夜族の多いところは、どんどんこういう店ができてますよ」

ちょうど三時。時間単位のレジシメにかかった店員に声をかける。

「がんばって。ごちそうさん、またあした」

〃反省坂〃

元気をとりもどして歩きはじめると、やがて〃反省坂〃にさしかかる。

都電の学習院下停留所のあたりから、千登勢橋までの約五分。だらだらの登り坂。ここは〃獲物〃が何もないかわりに、春ともなればツツジなどが咲きほこり、心をなごませてくれる。

「ここで今日あったことを反省し、明日どうしようかと考えるんです。時たま、五分くらい、ボケーッとしている時もありますよ」

そんな時、考えているのは、夢をどう実現するのか、ということであったり、嫁入り前の一人娘のことだったりする。

「自分で自分の将来ってものを、あきらめてしまうんだったら、ずるずるべったりで、そのまま家にいられたかもしれない。だけど、これまでは自分の人生を生きてこなかった。忍の一字だった。だから、何もないところから、一から出発しようと思ったんです。そして、できれば、最後の十年間は、自分の事務所をもって働き

たい。このあいだは第二次までいって落ちちゃったけど、今度こそ経営コンサルタントの資格をとりますよ。もうこんな生活には、おさらばしなけりゃ。やっぱり、少し甘えがでてきてますからね」

松下さんは、そっとふところからカードをとりだした。

「ちょっと入ったんでね、生命保険をかけたんですよ。これをやっとかないと安心して歩けないんだよ。受けとり人は娘にしてね」

池袋駅

四時少し前。西武デパートの手前の通称ビックリガードをくぐって、池袋駅西口へ。階段の下やシャッターの前には、まだ何人かがエビのようになって寝ている。後日、その一人が冷たくなっていた。

シャッターの一角が開く。まだところどころしか点灯していない地下構内は、おりてきた人の影と足音が不気味だ。

グッ、ガチャ、グッ、ガチャ……。100円、120円、140円の自動販売機に順番に灯が入る。

改札口には、まだだれもいない。素通りして、四時二二分発、山の手線外まわり電車の始発にのりこむ。すみっこの席は〃指定席〃。

「おはよう」。常連が声をかけてきた。三十五、六才。松下さんの話では、ダフ屋などでくらしている男だという。向いの席は魚河岸に行く長靴姿の二人。

松下さんのこと

電車は走りはじめ、松下さんは腕をくんだまま眠りについた。

知りあってから約二年。〃よくがんばるなあ〃という気持のする半面、言葉のはしばしに、〃オレだけが必死に生きているんだ〃といった、どうまんな感じもうける。ゴミ箱の中を批判する言葉には、自己弁護的なものさえ感じる。

「あんたの人生がかけがえのないように、この子の人生もまたかけがえがないんだよ。ひとを愛するということは、知らない人生を知ることでもあるんだよ」（『太陽の子』より）という、『たたかいのルポ』創刊号にのった、中沢さんの「あとがき」を読んだ松下さんは、「こういう気もちでなけりゃ、私を説得できないよ」と言った。

松下さんも必死なのだろう。しかし、労働することと結びついた必死さでなければ、世間の人は信用してくれないのが当り前だ。

数日後、夜十時半ころ、大久保駅南口の近くを、小学校三年くらいの男の子をつれ、赤ん坊を背おった婦人が、うば車に世帯道具をつんで歩いていた。男の子が「お父ちゃんは、三分の一が女の人で、三分の一がお酒で、三分の一がテレビなんだよね」と、くったくのない声でしゃべっている。

気になってついていくと、〃お二人様二千五百円〃の連れ込み宿の裏木戸に入っていった。さっき、パンを買っていた店の主人にきくと、「新宿の靴みがきですよ」。なかなかいい商売になるらしいよ。一日六千円くらいらしい」と教えてくれた。

電話工事で夜の八時から五時まで働いていたダンプ労働者の一人は、昼も八時から五時まで働いていた。自分が代表格になってやっていた仕事が、仲間の分もふくめて一千万円近い賃金不払いにあったため、家にも帰らず、ダンプの中で寝て、仕事をしていたのだ。

松下さんは「いよいよとなったら、スポンサーが一人いる」とも言うが、一歩一歩の努力なしに、夢がかなえられるものでないことは、松下さん自身が一番よく知っているのではないか。

近く、ビジネスホテルに住みこんで、フロントの仕事を始められそうだという。ぜひがんばってほしいものだ。